

浮嶽神社木彫像試論 ―如来立像を中心に―

宮田 太樹（九州大学大学院）

浮嶽神社は、古来、山岳仏教の栄えた脊振山地の西端、玄界灘を眼下に望む浮嶽の山麓にある。同神社には、如来立像・如来坐像・僧形立像の三軀の木彫像が伝来し、いずれも等身の大きさと、木心をこめたカヤの一材から像の大半を彫出するという古様な構造をもつ。加えて、厚みのある体軀や翻波を交えた衣文などにも平安初期彫刻に通有の特徴が認められ、九州における仏像彫刻の展開を考える上で無視できない作例として夙に知られている。

本発表では、とりわけ如来立像（以下、本像とする）に焦点をあて、その造形を浮嶽のもつ場の意味や当時の社会背景との関係から論じていく。

最初に、本像の造形の特徴を九州及び畿内の作例との比較から検討し、9世紀前半の造像で大宰府を介した南都風の受容が認められること、腹前を渡る衣を二段に折り返す点や逆手の印相をとる特色は、当該期の作例にほとんど類例がないことを指摘する。

次いで、浮嶽から程近い、肥前国松浦郡に所在した弥勒知識寺が、本像の制作された9世紀前半に復興されていることに注目し、この復興が、承和年間の遣唐使派遣に伴う航海安全を祈る機運の高まりを背景とし、浮嶽神社木彫像成立の直接の契機となったとする近年の議論を継承しつつ、新たに「観世音寺講師」なる役職を検討する。この役職は、弥勒知識寺の復興を主導するなど、当時、大宰府管内諸国の寺院を統括する権限を有していたが、東大寺の戒壇院を出自とし、本像のような南都風の造形が当地で実現するための前提条件となっていた。

さらに、浮嶽は、観世音寺と弥勒知識寺とを結ぶ官道上の国境に所在する、いわゆる「名山・浄処」に相当し、古来官僧たちの山林修行の場であったと推定されるのみならず、東アジア地域の海上交通における主要なランドマークであるなど、仏像が安置されるのに相応しい地勢的条件を備えていることから、遣唐使の派遣を控えた承和年間に本像を含む浮嶽諸像が制作された蓋然性はきわめて高い。

最後に、承和の遣唐使として入唐した円仁が渡海の前後に祈りを捧げた神々の中に含まれる「松浦少弐之霊」が、反乱の後に没した藤原広嗣をさし、弥勒知識寺が彼の霊を鎮めるために、天平17年(745)に建立されたものである点に着目する。そして、本像の服制が同時代の作例にほとんど見られない復古的なものであること、笠置寺の弥勒磨崖仏をはじめ奈良時代の弥勒仏にはわずかながら逆手の印相が採用されていることを傍証として、本像が弥勒として制作された可能性を指摘するとともに、今は失われた天平17年創建当初の弥勒知識寺の本尊の姿が、その像容に取り込まれていることを試論として提示する。

以上の考察から、本像が古代九州における中央様式受容の様相を知る大きな手がかりとなるのみならず、怨霊信仰や弥勒信仰など古代仏教美術史に関わる重要な問題を考える上でも有益な視座をもたらす作例であることを主張するものである。